

他力

― 住職便り ―



第20号（令和二年三月）

専徳寺住職 弘中満雄

「おらあ、石の下にはおらぬぞ！」

【三月四日】

突然ですが、今月四日は妙好人（篤信な念仏者を指す）で有名な「讃岐の庄松」の命日でした。今年は百五十回忌でした。

庄松は現在の香川県東かがわ市土居で百姓をしながら暮らしていました。生活は貧しくとも、素晴らしいお念仏者だった事が言行録に残っています。

無欲で、世間体を気にせず、東に西に、仏法を聴聞し、思いのままに行動し、人々にありがたい法味を伝えていききました。そのさとしぶりは、少しかざり気もなく、単刀直入に法義の核心をずばり云いきっていたそうです。

【石の下には】

庄松さんにはお墓についての面白い話があったわっています。

庄松が臨終の床についた時、近くの村の市蔵という同行（同じ念仏の仲間）が見舞いにやってきました。庄松は生涯、独身で、したがって子供もありません。ひとりぼっちで寝ているすがたを見てあわれにおもった市蔵は、彼のために墓をたててやろうと思いたちました。

他の仲間にも相談すると、みな賛成してくれましたので、市蔵は庄松の枕元へいき、「死んだら墓をたてるから、後のことは心配するなよ。」

すると庄松は、にこりともせず、

「おらあ、石の下にはおらぬぞ！」

と言い放ったそうです。

お念仏に生きる者は「独り生まれ独り



死ぬ」と自覚しつつ、如来様と常に一緒です。よって煩惱の生涯がつければ、ただちにお浄土という永遠な「いのち」の境涯に生まれます。そして阿弥陀様と同じ功德を完成し、すぐさま阿弥陀様と同じくあらゆる世界にみちみちて、苦悩の者を救うはたらきをさせて頂きます。

「キリギリスじゃあるまいし、おれは石の下やら草葉のかげなどにいないぞ」と庄松はいいたかったのでしょうか。

皮肉なことですが、庄松がなくなると、その十三回忌、有縁の人々が墓標をたてました。さらに五十回忌、玉垣をめぐらした立派な墓に改修されました。

「おらあ、石の下にはおらぬぞ」という庄松の声がひびいてくるお墓。そういう意味では、お墓もまたすばらしい法縁（み教えのご縁）となります。

（参考、梯実円『妙好人のことば』71頁）

【悠然なる道】

まもなくお彼岸です。お墓をご縁に、お念仏のご縁に遇います。

諸行無常……世間の事が気にかかり、わが「いのち」のはかなさに油断し、漫然と生きてきた私に気づかされます。

今、仏様のお慈悲に出会う時、見た目は同じでも「漫然から悠然へ」と、人生の道は自然と変化していました。

「今日何があっても心配なかった。」日々の生活に右往左往しながらも、忪の部分はゆるぎません。

人生に油断しているのではなく、最後まで悠然と生きるお念仏の生活。ご一緒に歩んで参りましょう。（おわり）

